

子育て、親(自分)育て、 そして第二の子育て(介護)

一鐵 陽子

全日本家庭教育研究会 小樽支部 教育モニター

はじめに

私がポピーと出会ったのは、22年前です。長男が年長の時でした。小学校入学と同時にモニター活動に参加しました。主人の両親と同居していましたが、地元出身でない為に近所に同世代の親や子供とのつながりがありませんでした。育児本を読み「こうであらねばならぬ」と偏った考え方で子供に接していたことを思い出しました。入園後は多くの先生や友人に恵まれたおかげで、良い方向へ軌道修正をすることができました。

ポピーと共に子育て、親(自分)育て

モニター活動に参加した頃は、子育てや学校教育の右も左も分からない新米です。そんな時に、子供との接し方や勉強の事などの不安をいつも力強く支えてくれたのが、ポピーを配本していたお宅のお母さん達や支部長の奥さんでした。大きなお子さんのいる方からは、子育てのノウハウ、反抗期の事などを色々教えていただきました。やがて我が家にも反抗期という怪獣がやって来ました。一生懸命に勉強していた息子が、ある時、手付かずのポピーで高い山を築いてしまいました。会員にお伝えしている事を実行できていない自分に、モニターとして情けなく落ち込むことも、しばしばでした。三歳下の長女が中学生

の頃は、反抗期と思春期の嵐で、親として痛いところを衝かれ、本気で言い合いになり、思春期と更年期のバトルが繰り返されました。そんな時も支部や他のモニター、友人そして家族の支えがあり、乗り越えることが出来たと思っています。

ポピーでは会員同志の座談会があるので、とても勇気づけられたことを思い出します。

子供との会話の中では、どんなに腹がたっても馬鹿にした言葉をあびせるのは禁物です。自尊心を傷つけることは、親であってもしてはならないと思います。子供を信じることしかありません。信じられて育った子供は、まわり道をして必ず戻って来ます。反抗期が通り過ぎるのを見守るしかありません。大人へと成長していく過程なのです。私が怒っている時、姿を消す我が子等は、きまって祖父母の部屋でくつろいでいました。地雷を踏んでしまった時の安全地帯だったのでしょう。逃げ場も必要なのです。そこから戻って来ると落ち着きを取り戻し、意外と素直になっているから不思議です。祖父母はやはり子育ての大先輩でした。

私は自分の子育ての失敗談をモニター活動の時に話すことがあります。特に勉強についてですが、子供が勉強せずにポピーを山積みになっているお母さんの気持ちがよく分かります。そのような時は、今学校で勉強しているところから学習する様にアドバイスしています。親は勿体ないので初めから使わせようと考えますが、子供は現在習っているところからでないに興味を持って勉強しないものです。自分の失敗経験がいかされる時です。

多くの人に接し、多くの悩みや相談を受け、勉強のことだけに限らず共に考え、また励ま

され22年が過ぎました。その間にはPTA活動にも積極的に係わるよう心がけました。そこで学んだことは、先生と保護者とが互いに助け合い良い関係を築くことで、子供達も互いに仲良く助け合う気持ちが育まれるということです。それは互いに悪口や陰口を言わないということが、基本であると実感しています。多くの経験は楽しいことも苦しいことも、人として親として自分が育っていく上で必要な要素なのです。

家庭力

三十八年近く前から平澤興先生が考えられた全家研の家庭教育五訓がありますが、そのひとつに「親は、まず、暮らしを誠実に」という言葉があります。それこそ家庭力に係わる言葉であると再認識しています。現在の家族構成は様々です。昔の様に働き手はお父さんで、お母さんが家庭を守っているといったケースは少なくなっていると思います。

しかし、やはり家族を支えてくれているお父さんの立場をしっかりと子供達に認識させる必要があると私は考えます。たとえ共働きであってもです。お父さんをたてるということはとても大切で、父親の強さというものが子育てにおいて必要な時があります。その為には、賢いお母さんになりましょう。シングルマザーの場合でも、父親の強さを母親が持たなければならぬ時があります。私は、すぐ怒る感情的な母親ではありますが、子供に対して現在まで心に決めて実践してきたことがあります。

- ・ 夫や祖父母、学校の先生や友人の悪口を、絶対に子供に言わない。
- ・ 『ポリアンナ』の様に、相手の良いところ

を探し、子供に話す。

これは、我が子の兄妹間でも同様です。たとえば、「お兄ちゃんはこんなに貴女のこと大切だと言っているよ。嬉しいね。」と妹に話してあげたり、兄には、少々大げさに「〇〇ちゃんはお兄ちゃんが〇△してくれるからとっても嬉しいんだって。」と言ったりする具合です。

そのように育ててきた我が子も思春期の嵐を体験し、今27歳と24歳になりますが、互いに助け合い仲良く思いやりのある人に成長してくれました。

夫婦喧嘩をしても、互いの悪口は子供に言わない。嫁姑の間でも同様で、互いに子供に愚痴を言わないことです。

特に祖父母のことは「良かった探し」を頻繁にして、祖父母優先の暮らしをしてきました。その成果だと思いますが、二人共、祖父母を含めお年寄りに対してとても親切な大人になってくれました。

私の子育ては学習面で失敗したところもありましたが、情操面ではうまくいったのではないかと自負しています。自分自身も「良かった探し」のお陰で、少しは子供と共に成長できたと思います。それは忍耐でもありますが、確実に自分も育っていける方法でもあります。

家庭力は学力面だけではないと思います。何か問題が起きた時には家族が支えあって、しっかり手を繋いでいけば、必ず乗り越えることができます。

人生には何度か、立ち足かかる問題が訪れる時があると思いますが、家庭力があれば乗り越えることができます。それを培うのは、誠実さであり少々の忍耐でもあり、互いを思

いやる心であると、私は確信しています。

のあるモニターに成長していきたいと思っています。

第二の子育て(介護)

同居の両親は、95歳の父(要介護2)、母91歳(要介護5)でした。結婚と同時に同居し、ここ何年間かは、ひとりで起き上がることや歩くことができなくなった母を在宅介護していました。両手を持って一步一步歩かせる日々が続いていましたが、少しずつ自分で歩行器を使って移動することができるようになりました。

ひとりで伝い歩きをして窓の外を眺める母を見た時は、本当に嬉しかったのを今でも思い出します。その頃のカレンダーには「母がひとりで立った。」「母がひとりで歩いた。」等と書き込んであります。

まるで我が子が初めてつかまり立ちした時、歩き始めた時のカレンダーのようでした。細くなった身体を抱きかかえオムツを交換し、髪を整えてという毎日が、何だか子育てのように感じてきました。とても愛おしく、辛くても楽しくもありました。

そんな母が突然亡くなり、子供を奪われた母親のように、私は精神的なショックを受けたのです。しばらくは死を受け入れられずに体調を崩してしまいましたが、百箇日を終えて気持ちも落ち着き、今では子育てと同じ感動をくれた母に感謝しています。残された父に元気で楽しく過ごしてもらうことが、私のこれからの生きがいだと思っています。

何事も考え方次第で、辛くもなり楽しくもなります、私は介護経験を通して、子育て同様の充実感を味わうことができました。

これからは、在宅介護のこともアドバイスしていけるような、幼児から介護まで広がり